

# バトンをつなぐ

6年 物語文 6番

名前

運動会まで、あと一週間。さくらは、リレーの選手に選ばれたことが、いまだに信じられなかった。クラスでいちばん足がおそいわけではないが、決して速い方でもない。「どうしてわたしが……」放課後のグラウンドで、さくらは小さくため息をついた。

第一走者は、クラスで最も足の速いゆうただ。ゆうたは、地面をけるたびに砂ぼこりを上げ、風のように走りぬけた。それにくらべて、自分の走りは、なんとおそく見えることか。さくらは、走るのがこわくなった。「わたしのせいで、負けたらどうしよう。」その思いが、重い石のように胸の底にしずんでいた。

ある日の練習で、バトンをわたす場面をくり返していたときのことだ。速いゆうたが、なかなかうまくバトンを受け取れず、何度も落としてしまった。あせったゆうたは、「さくらのわたし方がおそいんだ。」と、強い口調で言った。さくらは、くちびるをかんて、下を向いた。なみだがこぼれそうになった。

その様子を見ていた先生が、静かに声をかけた。「さくら、あわてなくていい。相手の走るスピードに合わせて、そつとバトンをおくり出してごらん。」さくらは、言われたとおりに、次に走る人の背中をよく見て、そのリズムに合わせて手をのばした。すると、バトンは、まるで水がすべるように、なめらかにわたっていった。「今のはよかったぞ。」先生の言葉に、さくらの胸が、ぼつとあたたかくなった。

それからのさくらは、変わった。速く走ることよりも、相手を見て、いちばんよいタイミングでバトンをつなぐこと。それが、自分にできる役目だと気づいたのだ。毎日、だれよりも早くグラウンドに出て、バトンパスの練習をくり返した。

運動会当日。青い空の下、リレーが始まった。ゆうたが飛び出し、バトンがつながっていく。さくらの番が来た。前の走者が近づく。「今だ。」さくらは、落ち着いて手をのばし、相手のリズムに合わせて、そつとバトンをおくり出した。バトンは一度も落ちることなく、次の走者へとつながっていった。

結果は、二位だった。それでも、走り終えたさくらの顔は、太陽よりもかがやいていた。「わたしにも、できることがあったんだ。」ゆうたが、息を切らしながら近づいてきて、てれくさそうに言った。「さくら、ナイスパス。」二人は、顔を見合わせて、にっこりわらった。

(1) 物語の初め、リレーの選手に選ばれたさくらは、どんな気持ちでしたか。最も適切なものを一つ選びましょう。

ア 選ばれてうれしく、自信にあふれていた。  
イ 自分でよいのかと不安で、気が重かった。  
ウ まったく気にせず、平気だった。

エ 走るのが楽しく、わくわくしていた。

(2) 「重い石のように胸の底にしずんでいた」という表現は、さくらのどんな気持ちを表していますか。説明しましょう。

(3) さくらの気持ちが前向きに変わるきっかけとなった出来事は何ですか。文章から読み取って書きましょう。

(4) ゆうたの人物像について、この物語から読み取れることとして当てはまるものを二つ選びましょう。  
ア 足がとても速い。  
イ いつも冷静で、決して人を責めない。  
ウ あせると、きつい言い方をしてしまうことがある。

エ 最後まで、さくらを認めようとしなかった。

(5) さくらは、この物語をとおして、どのように変わりましたか。「役目」という言葉を使って書きましょう。

## 書き方のヒント

「はじめは、くだったが、をきつかけに、と気づいた」の形でまとめよう。

「役目」という言葉を必ず入れよう。

# バトンをつなぐ

解答

6年 物語文 6番

名前

運動会まで、あと一週間。さくらは、リレーの選手に選ばれたことが、いまだに信じられなかった。クラスでいちばん足がおそいわけではないが、決して速い方でもない。「どうしてわたしが……」放課後のグラウンドで、さくらは小さくため息をついた。

第一走者は、クラスで最も足の速いゆうただ。ゆうたは、地面をけるたびに砂ぼこりを上げ、風のように走りぬけた。それにくらべて、自分の走りは、なんとおそく見えることか。さくらは、走るのがこわくなった。「わたしのせいで、負けたらどうしよう。」その思いが、重い石のように胸の底にしずんでいた。

ある日の練習で、バトンをわたす場面をくり返していたときのことだ。速いゆうたが、なかなかうまくバトンを受け取れず、何度も落としてしまった。あせったゆうたは、「さくらのわたし方がおそいんだ。」と、強い口調で言った。さくらは、くちびるをかんて、下を向いた。なみだがこぼれそうになった。

その様子を見ていた先生が、静かに声をかけた。「さくら、あわてなくていい。相手の走るスピードに合わせて、そつとバトンをおくり出してごらん。」さくらは、言われたとおりに、次に走る人の背中をよく見て、そのリズムに合わせて手をのばした。すると、バトンは、まるで水がすべるように、なめらかにわたっていった。「今のはよかったぞ。」先生の言葉に、さくらの胸が、ぼつとあたたかくなった。

それからのさくらは、変わった。速く走ることよりも、相手を見て、いちばんよいタイミングでバトンをつなぐこと。それが、自分のできる役目だと気づいたのだ。毎日、だれよりも早くグラウンドに出て、バトンパスの練習をくり返した。

運動会当日。青い空の下、リレーが始まった。ゆうたが飛び出し、バトンがつながっていく。さくらの番が来た。前の走者が近づく。「今だ。」さくらは、落ち着いて手をのばし、相手のリズムに合わせて、そつとバトンをおくり出した。バトンは一度も落ちることなく、次の走者へとつながっていった。

結果は、二位だった。それでも、走り終えたさくらの顔は、太陽よりもかがやいていた。「わたしにも、できることがあったんだ。」ゆうたが、息を切らしながら近づいてきて、てれくさそうに言った。「さくら、ナイスパス。」二人は、顔を見合わせて、にっこりわらった。

(1) 物語の初め、リレーの選手に選ばれたさくらは、どんな気持ちでしたか。最も適切なものを一つ選びましょう。

ア 選ばれてうれしく、自信にあふれていた。

イ 自分でよいのかと不安で、気が重かった。

ウ まったく気にせず、平気だった。

エ 走るのが楽しくて、わくわくしていた。

(2) 「重い石のように胸の底にしずんでいた」という表現は、さくらのどんな気持ちを表していますか。説明しましょう。

(例) 自分のせいで負けるかもしれないという不安で、心が暗く、しずんでいる気持ち。

(3) さくらの気持ちが前向きに変わるきっかけとなった出来事は何ですか。文章から読み取って書きましょう。

(例) 先生に「相手のスピードに合わせてそつとバトンをおくり出してごらん」と言われ、そのとおりにするとバトンがなめらかにわたり、先生にほめられたこと。

(4) ゆうたの人物像について、この物語から読み取れることとして当てはまるものを二つ選びましょう。

ア 足がとても速い。

イ いつも冷静で、決して人を責めない。

ウ あせると、きつい言い方をしてしまうことがある。

エ 最後まで、さくらを認めようとしなかった。

ア・ウ

(5) さくらは、この物語をとおして、どのように変わりましたか。「役目」という言葉を使って書きましょう。

(例) 速く走ることにとだわるのをやめ、相手を見てよいタイミングでバトンをつなぐことが自分の役目だと気づき、自信を持てるようになった。

書き方のヒント

「はじめはうだったけど、うをきつかけに、うと気づいた」の形でまとめよう。

「役目」という言葉を必ず入れよう。

問1 イ

「どうしてわたしが……」「ためいきをついた」から、選ばれたことをよろこべず、気が重い様子が分かります。行動や会話から心情を読み取ります。

問2 （例）自分のせいで負けるかもしれないという不安で、心が暗く、しずんでいる気持ち。

「重い石のように」「しずむ」というたとえは、心配や不安で気持ちが晴れない様子を表します。直前の「負けたらどうしよう」も手がかりです。

問3 （例）先生に「相手のスピードに合わせてそっとバトンをおくり出してごらん」と言われ、そのとおりにするとバトンがなめらかにわたり、先生にほめられたこと。

四つ目の段落が転かんと点です。先生の言葉と、成功した体験、「胸がぱっとあたたかくなった」心情の変化に注目します。

問4 ア・ウ

「クラスで最も足の速い」からア。「あせったゆうたは……強い口調で言った」からウ。最後に「ナイスパス」と認めているので、イ・エは合いません。

問5 （例）速く走ることにこだわるのをやめ、相手を見てよいタイミングでバトンをつなぐことが自分の役目だと気づき、自信を持てるように変わった。

「役目だと気づいた」ことと、練習に前向きに取り組むようになった変化を書きます。最後の「わたしにも、できることがあったんだ」もまとめの手がかりです。